
鬼師

浅色ミドリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼師

【著者名】

Z3082A

浅色ノード

【あらすじ】

村に棲まう鬼。祭りを汚す者を決して許さない。だが、それはよくあるお伽噺のはずだった。

(前書き)

鯉が昇れば鬼は心を癒す。
その鯉に邪気を浄化され、穏やかに鬼は里へ帰つてゆく。
しかし、鯉を汚せば邪気は溢れ、鬼は再び姿を現す。
そしてこの地に災いをもたらす。

棟梁の一家で暮らす赤髪の少年、刀魔。
阿瀬戸村では年に1回、鯉のぼり奉納祭といわれる祭が行われていた。

祭のために棟梁の一家は、広場に巨大な鯉のぼりを掲げる。
鬼の邪気を払うための特別な鯉のぼり。
祭の日は一晩中踊り、騒ぎ明かすのだった。
自警団も兼ねている棟梁の一家。
その祭の見回りの最中、刀魔は不思議な現象に遭遇。
人間ではない何か。
赤く巨大なそれは刀魔に向かつて何かを語りかける。
ふと気付いたときには棟梁の家へと走り出していた。

本編

「おーい刀魔あー！もつと縄を張りやがれ！！」

長閑な田園風景の一角から、しゃがれた声が響き渡る。

「わあつてらー！」

広場の左右から大人の腕ほどもある麻縄が伸びる。

刀魔と呼ばれた赤髪の青年は、めいっぱい力を込めて縄を張った。

「バ力野郎！もーちつと右だー！」

角度を調節し、足を固定する。

足を固定したら胴体を掲げる準備だ。

広場の北側にあるそいつの頭から、南へ向かつて縄を張る。
強い風の吹くこの地方独特の建築法だった。

再び親方の掛け声が響いた。

「よーし、行くぞー！…せーのー！」

ぶわっと風のうなりを上げてその巨体が天に昇る。

下から子供達がはしゃぐ声が聞こえる。

その天高く昇った巨体は村のどこにいても見つけることができた。
季節は皐月か。

深い谷の奥地にある阿瀬戸村。

この村の特別な政として鯉のぼりの行事がある。

家の軒先や、村の至る所に小さな鯉は泳いでいるが、なんと言つても一際目立つのがこの巨大な鯉である。

阿瀬戸村には、鯉のぼりにまつわる伝記がいくつがある。

「鯉が昇れば鬼は心を癒す。その鯉に邪気を浄化され、穏やかに鬼は里へ帰つてゆく。しかし、鯉を汚せば邪気は溢れ、鬼は再び姿を現す。そしてこの地に災いをもたらす」

というのが村でおじじ、おばあからよく耳にする話であった。

それ故かどうかは定かでないが、村では鯉のぼりという行事は最

も特別なものであった。

「今年も立派に上がつたもんだ！ もう、一休みするか」
皆に休憩の合図を送ると、それぞれに散つていった。

しゃがれた声の主は、一人の初老の女性のところへ足を向ける。
「おう。一通り終わつたぜ」

「お疲れ様です。あなた」

微笑みながら用意していた茶を差し出す。
礼を言いながらそれを受け取り、一口啜る。

ほんのり甘い茶の香気が、疲れた体に染み渡る。

「カアー、うめえ！」

満面の笑みでもつ一度、家内に礼を言ひ。
女性も満足そうに笑顔で返す。

「お頭あ、櫓の修理終わりやしたあ」

そう言いながら部下らしい若者が初老の男性の前へ駆けてきた。
「そうか、ご苦労だつたな。お前えらも少し休憩しな」

若者は一礼して、去つていった。

弟子の姿が見えなくなつた頃に、しゃがれた声で呴く。

「今晚が楽しみだな」

「そうですね」

初老の夫婦は唇の端を笑みの形にし、晴天の空を見上げた。

鯉のぼり奉納祭。

年に一度、鬼の邪氣を吸い取るという特別な鯉のぼり「昇り龍」
を掲げ、そのうち一晩はお祭り騒ぎで夜を明かす。

昇り龍とは、先ほど広場で立てた巨大な鯉のぼりのことだ。
この棟梁の一家はお頭を中心とした村一番の大工だ。毎年のよう
に昇り龍の大がかりなセッティングを担つてゐる。

今朝は雲一つない晴天、今宵はいつになく里が騒がしくなる事だ
らう。

「今晚の祭りが終われば、少しは余裕が出来る。お前にもちつたあ
楽させてやれるな」

「何おっしゃってるんですか」

そんなやりとりを笑顔で交わしながら、時は夕暮れへと向かつて
いつた。

一刻一刻と迫り来る邪氣の存在に気づかず、阿瀬戸村は鯉のぼり奉
納祭への熱氣を徐々に上げていった。

この谷間の土地は相変わらず、村の上空では強い風が吹く。
集落の外側には田園風景が広がり、今は宵闇が包む。

しんと静まりかえった田畠と山脈。

鈴虫の声がそこかしこから聞こえてくる。

それとはまるで別世界のように、集落の方から太鼓の音が響く。
巨大な鯉が宙に浮かび、仄暗く赤みを帯びた色に照らされていた。
村の中心では賑やかに囃子の音色、輪になつて踊る人々が伺える。
今夜は一晩中この調子だろう。

朝になつて酔いつぶれた大人達の悲惨な光景も、ある意味では名
物だった

少し人の輪から外れると住宅地だが、みんな祭に出てほとんど人
の気配はない。

家の軒先にはそれぞれ、赤い提灯を掲げられていた。

神社へ向かう長い通りに連なつて、屋台が陳列している。

「今年もお頭飲み過ぎなきやいいんだけどな…」

そんな心配を余所に、刀魔は屋台を見て回つた。

棟梁を筆頭とした大工一家で育つた刀魔。

棟梁のことをまるで親のように慕つている。

刀魔には親がいなかつた。

この村の生まれでもない。

6年前、森の大きな木の前に、ボロボロの服を着た子供が倒れて
いたといふ。

体も痩せ細り、深く鋭い目つき。

ひどい状況にあることは想像に難くない。

偶然通りかかった棟梁が保護し、育ってくれたのだった。
だが彼には記憶がなかつた。

どうしてその場に倒れていたのかも、自分の名前すらも思い出せなかつた。

刀魔という名は棟梁がつけてくれたものだ。

かつこいいじやねえかと酒氣帶びた棟梁につけられたその名前を大事に、誇りにも思つていた。

「去年なんか砂倉爺さんの世話になるくらい飲んでたもんなんあ…」
この村で唯一の医者である。

いつも以上に飲み過ぎた棟梁は宴会の席で泡を吹いて倒れ、そのまま医者の世話になつた。

酒樽の半分は棟梁の胃袋に収まつたのだから無理もない。
翌朝にはピンピンしていたというのだ。医者からは「このじじいは死んでも死にきれないよ」とぼやいてた。

あれこれ考えながら見回りしていると、なんだか後ろが気になつて振り返つてみた。

「……氣のせいか」

誰かに見られていたような氣がしたが、特におかしな様子はない。

一つ強く、風が吹き付ける。

「なんだ？」

風の通つた方を見るが、やはり特に変わつた様子はない。
そう思つた刹那、荒ぶる波のような強風が押し寄せた。
すさまじい速度で木の葉が舞い、視界を埋め尽くす。

道の両脇の屋台も風に煽られ、音を立てて崩れてゆき、木の破片が様々な方向へ飛び散つた。

近くの木に背中をぶつけ、苦痛で顔が歪む。

その嵐の中、叩きつけるような風が刀魔に向かつて吹く。
とつさに両腕で顔を隠した。

しばらく荒れ狂つていた風も徐々に弱まり、閉じた視界の先からただならぬ威圧感が押し寄せてきた。

ゆっくりと目を開ける。

ぼやけた視界の中に赤い何かが見える。

その赤い何かからは威圧感、そしてただならぬ熱量を感じる。

じつとりと皮膚を焦がし、吹き出す汗。

目を凝らし、次第に焦点が合つてくる。

赤いものの正体を見て言葉が洩れる。

「なん…だと」

血のような色をした身体にざらざらとした表皮。頭部には一本の
反り返った角があり、口からは牙が剥いていた。
人間の3倍はゆうに超える巨体。

瞳孔のない赤い瞳は、確かに彼を捉えていた。
不思議と敵意は感じない。が、恐怖は感じていた。

その異形の口から、おぞましい声が響く。

「オマエノ身体、使ワセテモラウ」

巨人の身体から衝撃が放たれた。

とても凝視していられず、再び目をつむる。

刀魔の身体中に熱い何かが逆流してきた。

それは蛇のように全身を駆けめぐり、至る所からとてつもない熱

量が発せられてるようを感じた。

声にならない叫びをあげ、それでもなお、這いずり回る蛇は止ま
らない。

ようやく収まつたそれは、予想もしなかつたほどにすつと引いて、
全身から並々ならぬ汗が吹き出していた。

がつくりと膝を落とし、肩で呼吸する。

「…はあ…はあ…はあ…はあ…」

辺りは散々とした気配が拡がっていた。

露店のほとんどが崩壊し、通りを歩いていた人もそこかしこに倒
れている。

見回せば、自分が浮かんでいたようだった。

突然気分の悪いものがこみ上げてきて、胃の中のものを吐き出し

た。

「おえええ、うつ……げほつげほつ」

嘔吐物の中に、血も混じる。

体力が全てもつていかれたような疲労感。

いつのまにか先ほどの大人はいなくなつていた。

「くそ……いつたい」

よろめき立ち上がりうつと木に手をかけた時、嫌な鼓動が全身に1度響いた。

「お頭……！？」

なぜその言葉が出たかは分からぬ。それでもそこへ行かなければいけない気がする。

弾かれた駒のように、棟梁の方へ全力で駆けて出していた。つい先ほどまで祭で賑わっていた集落。

出店や建物は崩れ、辺りは一面火の海となつてゐる。

広場の人間も、行く先々で見かける人々も皆倒れていた。あの巨人の仕業か、それとも……。

奇妙な違和感のみが全身を支配し、理解不能な不安感に押し潰されそうになりながらも、棟梁の家をめがけて全力で走つた。

「お頭……！」

がたつと勢いよく入り口の戸を開けた。

しかしそこには、腹部から赤い血を流して倒れている初老の男性の姿があつた。

「お……お頭あああああああ……！」

駆け寄ろうとしたが、その足を止めた。

後ろに跳躍すると、左側の引き戸が崩れる。

鋭い斬撃と確かな威圧感。

砂煙の中から人の影が現れた。

「ふむ、避けるとは思わなかつたな」

次第に輪郭がはつきりとしてくる。

その男は、こちらを斜めに見据えて問い合わせてきた。

「貴様は鬼の臓物とやらを知つてゐるか？」

武士の姿をしたその男は、血を滴らせた刀を持っていた。

それを見た瞬間、刀魔の血が逆流した。

「お前がやつたのか！！？」

男は頭を抱え、面倒くさそうに答える。

「質問してるのは俺の方だ」

「お前はああ！！！」

拳を振り上げ、真正面から殴りかかった。

武士の男は少し身を引き、右手の裏拳で刀魔の頬を払った。

ゴツと音を立てて壁に激突し、苦悶の表情を浮かべながらも、すぐには男を睨んだ。

やれやれとぼやきながら、刃についた血を振り飛ばす。

抜き身を鞘に收め、刀魔に冷ややかな視線を向けた。

「お上の命令でな、鬼の臓物とやらを探してゐる。その爺は鬼について何か知つてゐる風だつたが、強情なやつよ。口を割らずそのままあの世へ逝きよつた。満足か？」

倒れている刀魔の前まで歩いてきて、胸ぐらを掴みあげた。

「もう一度問う。貴様は鬼の臓物を知つてゐるのか？」

「鬼の臓物？ そんなものは御伽話だ！！ そんなくだらないモノのためにお頭を……！」

ゴツッと音がして、刀魔は目を剥いた。

腹部に刀の柄の部分がめり込んでいる。

「貴様に構つてゐる暇など無い。あの気の短い尾都成公の御勅命なのでな。その爺と一緒にくたばつていろ」

男が出て行くと同時に、入り口の天井が焼け崩れた。

炎の中、刀魔は重い体を引きずりながらも倒れている老人の元へ這つていった。

「お頭……！！！？」

やつとの思いで側まで身体を引っ張つてきたが、その先の光景をみて再び心を抉られた。

奥の台所で、胸部に深々と包丁を刺されて倒れている老婦人がいたのだった。

息絶えている一人を見、自分の感情が内側から崩れしていく音を聞いていた。

「骨折り損だつたな……」

行列の行く馬の背に、武士の格好をした男がいた。腰には刀が提げられ、鞘に収められた刀は血の匂いがした。彼の右後方をゆく馬の武人が疑問を口にした。

「しかし珍妙でござります。どうして突然火の手が……。村にいたばかりは踊り、浮かれていた村人も残らずいすこへと消えてしまつていたし」

確かにその通りだ。

祭に紛れて「鬼」に関する情報を探ろうとしたのだ。

阿瀬戸村は何かと鬼の噂がついて回るところだった。

やれ1本角の鬼を見ただの、鬼に喰われただの。信憑性は全くといつていいほど無かつたが、これほどまでに広がつた噂だ。何があると思ったのだがな。まあ仕様のない。我々が火をつけたわけではないのだ」

そう、彼等が火をつけた犯人ではなかつた。

そして老夫婦を殺したのも、正当防衛に他ならない。

祭に浮かれてる村民を横目に、この伝統行事に詳しいという棟梁の家を訪ねた。

「御免下さい。ちょいとお尋ねしたい事がありまして」

暖簾に手を掛け、中の人間に問うた。

するとやや白髪の交じつた初老の女性が出てきた。

「おやおや、どうなさいました?」

「ここの近辺で鬼に関する祭をやつてると聞きまして。もしやこの祭が?」

「ええそうですよ。村で一番大きな鯉を掲げて鬼の邪氣を鎮めると
いうのです。昔からの伝統なので、詳しいことは分かりませんが」
「どうしたよ、密か？」

話を遮って、家の奥からやはり初老の男性が出てきた。

「ええ、お祭りのことを聞きたいってこちらの方が」
女性に紹介され、どうも、とお辞儀をする。

「火をかけたままなので、ちょっと失礼しますね」

「立ち話もなんでしょう、中へどうぞ」

お呼ばれに応じるが、ひと目みたときから男性はこちらを警戒してこるようだつた。

こちらも警戒するに越したことはない、か。

「それで、武士様がどんな」用で？」

「私の領主が伝記好きでしてね。この近くには鬼にまつわる噂があるとかで探しに参つた次第。広場にある大きな鯉のぼりも鬼の邪気を鎮めるといひらしいじゃないですか。ぜひそういう話をお聞かせ願いたい」

険悪なままでは引き出せる話も引き出せない。

少し大げさだらうか、好意的に話をもつてこいつとした。

「いや、ワシもそういう話には疎くてね。ただ伝統で毎年作り続けてこいつでだけさ」

「そうですか、残念です。他に伝統に詳しい方はいませんか？」

「んにゃ、もうそういう話を知ってるジジババは墓ン中さ。この祭もそのうち祭だけを楽しむためのもんになつちまつんじやないかねえ」

そういつて煙草をふかす。

この棟梁は一筋縄ではいかないようだ。それっぽい話をして飄々ととぼけている。何かを隠しているのは間違いないようだつた。

「広場の鯉のぼりを作ったのが棟梁だと伺いました」

「ああそうだ」

「唯一、あの鯉と同じ田線にあるこのお宅、偶然でしょうか？」

「かもしけねえなあ」

やはり面倒くさそうに煙草をふかす。

そろそろ本題に入つたほうがいいか。

「鬼の臓物、というものをご存じですか？」

キセルを持つ腕が、一瞬動いたのを見逃さなかつた。

「はて、なんのことやら」

「この家が異様に明るいように感じたのは、あの鯉のぼりの目が月の光を照らしてこの家のどこかを照らしているから。いや、光を集めているのか……？」

突如、ものすごい勢いで武士の男の身体が後ろに引っ張られた。

壁に激突し、衝撃で壁はひび割れた。

「ぐつ……」「老人、いつたい何の真似を」

そこまで言つて口をつぐんだ。

老人の顔は、人間のそれではなかつた。

目は白目を剥き、口からは凶太い牙が伸びていた。

皮膚の感触もざらざらと硬い。

徐々に赤黒く染まつていく肌に恐怖すら感じた。

「この……放せ！！」

渾身を込めて下あごを殴り飛ばした。

押しつぶされそうな圧力から解放され膝をつくが、殺氣を感じて右に跳躍する。

すんでの所で斬撃をかわすが、人が打ち付けたものとは思えない衝撃が建物全体を揺らした。

包丁を持った初老の女性、らしきものがそこにいた。

老人と同じように、婦人も人のそれではなくなつてきている。

「化け物かこいつらは」

口にたまつた血の塊を吐き出し、受け身の構えをとる。

人の外觀をした女性は猛スピードで突進し、武士ごと台所の壁へ激突する。

もくもくと立ち上る砂煙の中、女性の両腕を押さえつけた形で一

人は立っていた。

女性の右手に持つ包丁がじりじりと寄つてくる。

咄嗟に左を掻む手を放し、包丁を持つ手の方に自らの両手を添える。

男は身体を巻き込む形で避けると、女性の左手は壁に突き刺さつた。

その回転を利用して女性を地面に叩き伏せ、彼女の包丁を奪つた。そのまま胸元へと振り下ろす。

力チン、と鉄の刃を弾く音が聞こえたが、構わず力を込めて深々と突き刺した。やはり人間の肌とは思えない。

のびていた男の化け物が気付き、こちらへ向かつてくる。

武士の男は腰に下げた刀を構え、一閃した。

人間ではないはずだが、恐らく一人は絶命しただろう。

刀についた血の色は赤い。

最初の頃は彼等から人の雰囲気を感じられた。

「鬼の臓物……」

その言葉を出した頃から異変は始まった。

「いつたい何だというのだ……。不老長寿のお伽噺ではなかつたのか？」

異形との殺し合いに気付かなかつたが、家中が火の海となつていた。

窓の外を見ると、村中に火の手があがつている。

「この一瞬で何が……」

何か得体の知れないものが動いてるのやもしれない。

そう考え去ろうとした時に、あの少年が飛び込んできた。

あの少年には悪いが、もうあの村に関わろうという気は起きない。火の手があがつて自分の身も危ない中、彼を説得する時間もなかつた。

夢でも見ていたのだろうか。

かぶりを振つて悪夢を払う。

そんな様子を見て、部下の一人が声をかけてきた。

「尾都成公になんと申し入れましよう…。奥村様、いさかの絹などを献上なさってはいかがです?」

「……仕方あるまいな。何か巧い言い訳を考えねば…」

奥村と呼ばれた武士は、苦虫を噛み潰した表情で馬を指揮していった。

それは、2年前に遡る。

町や村で流行病が流布し、靈だの鬼だの祟りだの、そのように噂されるようになつた。

時の大将は尾都成。かつて西の蛮族と戦い、多大な戦果を挙げた將軍だ。

だが尾都成ももう50を過ぎている。

靈や祟りという類が大の苦手で、お抱えの占い師や祓い師なるものがいた。

祈祷や占いを繰り返すも、一向に病や飢饉が収まる気配はない。そこで奥村たちに、次のような命令を下した。

「不老長寿の法を探して参れ」

と、お伽噺のような無理難題を押しつけたのだ。

それも民のためではなく、自分が生き残るための秘薬を。

「尤も…、そんなものなど無いだろうがな」

奥村は口の中で咳き、誰にも聞かれてないのを確認すると安堵の溜息をついた。

この2年間、幾百もの不老不死にまつわる伝記を尋ね歩いた。

その全てがただの噂や嘘方便並べたものだった。

「あの里の者には悪いが、やらねば俺が喰われる身でな」

誰ともなく咳いたその表情は、どこかしら物寂しいものがあつた。

「奥村様…」

胸中を察したのであらう側近の一人が声をかけようとしたその時、

背後から部下の鋭い声があがつた。

「ぐああああ！！！」

一行は声のしたほうを振り返る。

周囲には何もおかしな点はなく、部下だった人間の肉塊、それだけが残っていた。

「奥村様！先ほどの里の方角で赤い何かが！」

「何かとは何だ！？」

「分かりません！赤い光が天に昇つていくかのようなものが見えました！」

そう叫んだ部下に天上から紅色の光が降り注ぐ。

先ほどの肉塊となつた者同様に、一瞬で血と肉の塊と化した。その様を確認したと同時に、轟音と共に空より何かが振ってきた。とてつもない衝撃音と砂埃が舞う。

「何だ！何が起こつたのだ！」

側近の一人が声をあげて周囲を見回している。

しかし大量に舞つた砂埃のせいで一面の視界は遮られていた。

「奥村様！これは一体…！」

「分からぬ…！皆の者！無事か！…？」

返事は返つてこない。

すうっと静かな風が吹いて、砂埃を運んでくれた。

ようやくかと安堵したのも束の間、奥村は驚愕の表情を張り付ける。

「貴様は…！」

「里ヲ穢シタ罪八重イ」

「！」

砂埃の去つた跡に映つていたのは、全身の色が紅く染まつた刀魔だつた。

先ほど殺されかけた老夫婦同様、身体は変化してまるで人間ではない。

足下の土はそこだけ地盤沈下していく、とてつもない熱量が放出されていた。

そして、刀魔の口から出た声音は、人間のものではなかつた。人語は確かに聞き取れた。

だが、腹から末端の手足まで痺れさせるよつた深く低い、そして

暗い声。

奥村が馬から降り、刀を抜く。

辺りは馬は暴れ逃げだし、部下の幾人かはもう原型を留めていな
い。

景色は長閑な田園風景なのだが空気がひどく、重い。

刀魔と、奥村。

対峙する双方の間には殺氣と緊張が走つていた。

「お前は……何物だ……！」

滴る汗が頬を伝い、底知れぬ恐怖を前にしてやつとの思いで声を絞り出した。

「我力名ハ劫魔。ウヌレラ人間ガ犯シタ過チヲ制裁スル」

「劫魔……」

この状況でさらに後頭部を殴られたような衝撃に襲われた。

劫魔。

かつての御伽話の一つで、人間が過ちを犯す度に、その地を滅ぼしにやつてくるという鬼の話である。

無論、それはどこにでもある御伽話だと思つて聞き流していたのだが、いつ、どこかで聞いたその話が今となつては思い出せない。

「鬼か……」

奥村の流れる汗は止まらず、握る刀もカタカタと震えていた。

「う、うああああああ！」

側近の一人が恐怖に耐えきれず、逃げ出していった。

刀魔の、いや劫魔の紅色の目が濃さを増し、奥村の横を何かが通り抜けていった。

ぐちやつ。

聞き慣れないその不快な音に、目だけ後ろにやる。

在らぬ方向に間接が曲がり、身体だった肉塊が落ちていた。

鬼の方へ振り返る。

その紅い瞳は静かにこちらを見ていた。

「皆殺ス」

膝を曲げる予備動作をしたかと思うと、刹那の間に奥村の目の前に来ていた。

「なつ！？」

劫魔の右手が腹部をえぐり、身体を左にひねつて回し蹴りを当てる。

こらえきれずに奥村の身体は4・5メートルほど吹き飛んだ。持つて行かれた腹の肉から血を滴らせながらもようやくその場に立つ。

地面に刀を突き刺し、立つてするのがやつとだった。

「化け……物めえ」

呻き、睨み返す。

劫魔の手には赤色の玉のようなものが浮かんでいた。

徐々に大きさを増し、手のひら大になつたそれを、地面に叩き付けた。

地鳴りが響き、空気が揺れ、至る所から赤い溶岩が勢いよく吹き出した。

天変地異を起こすほどの鬼。

その力は強大で、全てを無に帰すとまで言われている。だがそれはただのお伽噺だ。

そしてその、お伽噺が目の前にある。

吹き上げる溶岩を見上げ、真っ白になつた頭の中。

無言に、ただ訪れる死を受け入れた奥村の姿がそこにあつた。

(後書き)

初投稿作品です！

和風ファンタジーのややダークな設定。

最近続きを書いてもいいかもと思っています。

2011年8月30日書き直しました 原作者にならう心募作品。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3082a/>

鬼師

2011年8月30日03時11分発行